



街灯の明かりがおぼつかない雪道に、遠くから人影が二つ現れる。影の主は二人の少年だった。身体つきは少しずつ大人になっているものの、まだあどけなさを表情に残す彼らは、駅を目指していた。セパチカは大きなりユックサクとトランクを携え、オロソはマフラーに口元を埋め、雪を踏み固めるようにして歩いていた。セパチカは今、一人この小さな田舎町を出て、都会の学校へ行くこうとしていた。見送るオロソは何ひとつ気の利いたことが言えずに押し黙っていた。

やがて地面は積もる雪から石畳へ、石畳からすぐにレンガ組みの駅の構内へと移り変わった。セパチカはまっすぐ、迷いのない足取りで切符売り場へ向かった。オロソはなるべく音を立てずに簡素なベンチに腰掛け、ぐるりと駅の中を見渡した。閑散とした空間にブーツの足音が反響していた。乳離れする頃からお互いを知り合っていた彼らは、もはや兄弟や家族を超えた、自分の一部に近い存在だった。それも数時間後にはもう遠い存在になってしまふのだと考えると、身を引き裂かれる思いがした。奥手なオロソにはその感情の落としどころを見つけることすらできずに、右手でトレンチコートの左袖を強く握りしめていた。

壁際に置かれているアップライトピアノも、シャッターの降りているベーカーリーも、自動販売機でさえも、全てのものが思い出を帯びていた。しかしオロソは今、つまりセパチカとの別れの時がやってくるまで、それら全てが思い出であることに気がつかなかった。悲しみと同時に恐ろしさすら抱いてしまっている。今のようになにかきつかけがなければ思い出すことができないほどに、これから僕はセパチカに関する様々なことを忘れてしまうのだ。その考えがオロソにはとても恐ろしく感じられた。

突然オロソの視界にコーヒーの缶が飛び込み、慌ててそれをキャッチした。その様子を笑いながら、セパチカが戻ってきた。

「暗い顔をするなよ、こんなときにさ」セパチカに言われると、オロソは無理矢理に顔をひん曲げて笑った。それを見てさらにセパチカが笑った。オロソは立ち上がってセパチカのトランクを持った。一度深呼吸をすると、二人の少年は顔を見合わせた。オロソはやはり神秘的な表情を隠せず、セパチカは余裕のある微笑みを浮かべていた。オロソはその裏に何かないか探るような疑いのまなぎしを抱いていたが、セパチカは改札に向かって歩き始めてしまった。オロソは缶をコートのポケットにしまい、その後を追った。

改札の横のカウンターには駅長が新聞を広げて退屈そうにしていた。セパチカがカウ

ターを指でトントンと叩き、切符を置くと、駅長はけだるげにセパチカを見て、それからオロソを見、最後に切符を見た。

ここでセパチカとオロソ、そして駅長の人柄について説明をする必要がある。セパチカはありとあらゆる悪行という悪行をやったのけ、大人たちからは叱咤され、子供たちからは恐れられていた。気弱なオロソは遠くからそれを見ていた。セパチカの暴走に自ら加担することとは一度もなく（巻き込まれることは多々あったが）、真面目な、しかし特出するほど優秀でもない、ごく普通の少年だった。そのような真反対な二人だったが、両親同士の仲の良さもあって幼い頃から親しく接していた。セパチカに友人と言える友人はオロソしかおらず、オロソもまたそうだった。

さて悪行というのはどのようなものだったかというところ、それは数え出したらきりがないほどの様々な悪行であったが度合いも子供らしいものから笑えないものまでほとんど様々だった。セパチカのその行いは常に大人を怒らせたが、駅長はというとこれまた特殊だった。駅の構内でどれだけセパチカがいたずらをして、駅長は感情を表には一切出さず、ただじっと見つめていた。セパチカも最初はそれに対抗して、いくつかの反撃―自動販売機のコインの投入口をガムでつまらせたり、改札に向かって爆竹を投げたりした―を行なったが、全く怒りも苛立ちも表さない駅長に屈し、一年ほどで諦めた。その二人の静かな対立を知っている者は、本人たちとそれを見ているオロソの三人しかいないだろう。一度も言葉を交わさなかったが、勝負はいつも静かに始まり、静かに終わっていたのだ。そして今、彼らはずいぶん、初めてごく普通の対話を行うのである。

「3番ホーム、二二時四五分発」駅長は切符に書かれている情報を断片的に拾い上げた。静かで無感動なその声は初めて聴いたものの、少年たちのイメージ通りの声だった。

「はい」

「えらく大荷物だが、今度は家出でもするのかね」

「はい、家出といえば家出です。寮生活を始めるんです。新しい学校でね」セパチカのひょうひょうとした態度とは裏腹に、隣のオロソはどきまぎしていた。

「どこにいくんだね」

「ピカデイリー・サーカス」セパチカが落ち着いた声で答える。

「ピカデイリー・サーカス」駅長が味気ない声で復唱する。

ピカデイリー・サーカス、とオロソが言葉に出さずに復唱する。その名前を忘れないようにそれから何度か復唱する。

駅長はじつと切符を見つめて、やがてハサミを取り出し、刻印を押し、カウンターに置いた。セパチカはそれをひったくるようにとり、せめてもの礼儀、という風にキャップをとって軽く会釈をした。

「それで？」という言葉添えて、駅長は今度はオロソへ視線を向けた。

「ああ、こいつはただの見送りです。別に無賃乗車するわけではなくてね、こいつは真面目なやつだから大丈夫ですよ」

「君とは違って、か」

「そう、『俺とは違って』、ね」セパチカは両手でダブルクォーテーションマークをチョンチョンと作り、駅長に向かってウインクをしてから改札を通過した。オロソは改札を通る時、駅長と視線が合い、すぐにうつむいた。それから何度かオロソは後ろを振り向いて駅長の様子を伺ったが、振り向くたびに目が合った。駅長の表情が読めずに、オロソはすっかり恐ろしくなってしまった。

「早く来いよ」セパチカはプラットフォームへと続く階段の途中から見下ろしてオロソに声をかけた。オロソはあやふやな返事を返して階段を上がった。

セパチカが変わったのはいつだったか、確かインターのハイスクールに上がった頃からだ。だったとオロソはうっすらと記憶している。その頃からセパチカはぱったりとふざけたことをやめ、学校の成績が良くなり、フットボールのチームで活躍するようになった。彼に何か変化を促す出来事があったのか、もしくはそんな出来事など全くなかったのか、いつも近くにいたオロソでさえもわからなかった。どんどん先を進んでいくセパチカは歩みを止めず、そして都会へと旅立つ。

プラットフォームのアスファルトは湿った濃い色合いで、屋根のない地面には雪が積もっていた。いくつかの人影と、微かな足跡がまばらに残っていた。吹き曝しの風に打たれながら、安っぽい赤色のベンチの雪をはらい、二人で座った。プラットフォームにはオロソのように見送りに来ているような人物はおらず、それぞれが大きな荷物を抱えていた。

「……向こうに行ったらさ」オロソが言葉をつかえている間に、また雪が静かに降り出した。二人はお互い同じ方向へ頭を向け、遠いところにある何かを見つけようとしているかのようだった。

「向こうに行ってもさ、またいつか会えるかな」言葉は発されるとすぐに雪景色に飲まれてしまった。プラットフォームでは、オロソの靴に着地した雪が少しずつ溶けて滴になり、時間をかけて流れ落ちてアスファルトへ染み込んでいった。

「多分、俺たちはもう会えないよ」その言葉もまたすぐに雪景色に飲まれた。オロソは言葉の意味をうまく咀嚼できなかった。

「……それはどうして？」

「別に会いたくないってわけじゃないさ。これはただの直感だよ、俺の」セパチカは訂正するように言い直した。

「今日、ここで汽車に乗ったら最後、お前とは会えない気がするんだ」

実際、彼の直感は間違っていないかった。それから一年と経たないうちに彼は戦争に駆り出され、そこでは何とか生き延びる事はできたものの、兵役を終えて戻ってから大学の近くのカフェで悪質なストーカーに絡まれている見知らぬ女性を庇って刺されて死んでしまう。その間に彼は一度もオロソと対面しなかった。これが本当に最後、彼らはもう会えないのだった。もちろん、そんなことは今の二人には知る由もない。

「それじゃあ、どうすればいいのさ」

「どうすればいいって、どうしようもないさ。ここで俺たち二人の時間はひとまず終わりっただけさ」オロソの表情はみるみる沈んでいった。

「別にまだ本当に会えないって決まったわけじゃない。ただの俺の勘だからな。でもまあ考えてみろよ、別れなんてよくあることだし、お前の周りの人間も、お前自身も、明日生きているとは限らない。だから全ての時間が最後だし、別れの重さはいつも同じだろう」そこまで言われると、オロソは何も言い返せなかった。

屋根と屋根の隙間から綿埃のような雪に混じり入って薄い暗闇が注がれ、寿命の短さを象徴するように点滅する蛍光灯の下で、二人は紛れもなく同じ感情を抱いていた。しかし彼らはその偶然に気づかなかった。セパチカはしきりに腕時計を確認した。オロソはそんなものなど少しも見たくなかった。しかしそうしている間にも汽車がやってくる時間は近づいていく。

それから不意に泣き出しそうになったオロソは、何かひどく申し訳ない気持ちになって、無理やり涙をとどめて、平静を装った。しかしそれでも堪らなかったオロソは、とにかく何でもいいからこの場所を邪魔するものを欲した。誰かの笑い声でも構わないし、暖かいスーパの匂いでも構わない、何でもいいから、とにかく何かだ。――爆撃機でも警報でも構わない――そうだ、ここを今すぐ爆破して吹き飛ばせば、別れなんてしなくていいのだ、とオロソは空想を膨らませていったが、それはどう足掻いても空想にすぎなかった。彼らにとっては悲しいことに、その時だけは彼らを邪魔するものは何もなかった。二人の座るベンチの延長線上

で誰かが軽く咳をしたが、その音も雪に飲まれ、オロソを救うことはできなかった。

「……今度さ、夏休みにさ、そっちに遊びに行ってもいいだろ」オロソは声のトーンの暗さを隠せないまま質問をし、セパチカは自らが産み出してしまった神妙な空気を払拭したいがために、思わず勢いよくオロソの方に顔を向けた。

「そう、そうだな、もちろん、また会おう、暑くなったらな」さっきと言ってることが違うじゃないか、と今度こそオロソは自然に笑うことができたが、口に出そうとはしなかった。夜の寒さは手袋をつけていないオロソの右手を芯まで凍えさせ（手袋の片割れをいつの日か、川に落としてしまったのだ。その時もセパチカと一緒にいた覚えがあった）、暑い季節が途方もなく遠いものを感じられた。

やがて遠くから汽笛の音が聴こえ、それから雪と空気が振動し、鬱屈としたプラットフォームに汽車のライトが差し込まれた。おもむろにセパチカは立ち上がってトランクを持った。姿を現した汽車はどんだんスピードを緩めていき、そして大きな音を立てて止まった。セパチカは汽車に乗り込むと座席に大荷物を乗せ、窓から顔を出してオロソと向き合った。セパチカも少し表情が崩れかけていた。オロソは辛うじて笑顔を残していた。その駅で降りる人は全くと言っていいほどいなかった。ここが世界の果てなのだと言わんばかりに、プラットフォームには人影が消え、オロソだけが残った。二人は顔を見合わせて、お互い言葉を探していたが、かけるべき言葉など見つからなかった。さっきまで強がっていたセパチカの方が困惑しているように見えた。それを察知してオロソは右手を差し出した。セパチカはそれを右手で握り返した。セパチカはオロソの右手の冷たさに笑ってしまった。それから窓から身を乗り出して抱き合った。相手に顔を見られないのをいいことに、お互い感情をあらわにした。

「お前、手が冷たい」半分涙まじり、半分笑いまじりの声でセパチカが言った。

「ごめん」汽笛の音が遠いように感じられた。これからセパチカはいくつもの駅を通過し、いくつもの路線を乗り継ぎ、ピカディリー・サーカスへと向かうのだ。そこがどのような場所なのかオロソにはわからなかったが、きつと素晴らしい場所なのだと思った。セパチカはこの小さな町よりも、そこを選んだのだから。

「暖かくして寝ろよ」

「ありがとう」気持ち溢れそうになり、オロソは片言しか話せない。二人は感情に潰されそうになり、気が狂いそうになったところで手を離し、二人の間に距離が生まれた。これからずっと、その距離が今一度近づくことはないだろう。最後にまたお互い寒さで赤くなった

顔を見合わせて笑った。

「それじゃあ、またな」

「またいつかね」もう一度汽笛を鳴らしてから汽車は動き出した。二人は手を振り、ずっと振り続けた。セパチカは窓から顔を出したまま、オロソはそのまま手を振り、やがて乱暴にトンネルの影がセパチカを飲み込むまでずっと振り続けた。

やがて完全に汽車が消え、蒸気をふかす音が消え、積もる雪の震えが途絶えたとき、プラットホームには雪解ける落下と静かにたたずむオロソだけが残った。駅長が階段を上り、その足音の鳴る方へオロソは顔を向けた。まだ彼の頬に涙の跡が微かに残っている。

「見送りは済んだのかね」その時のオロソには、駅長の無粋な表情は優しさを湛えているように見え、言葉が感情に迫いつかないたどしさと訴えかけた。

「あいつは、いたずらばかりしてる、ろくなやつじゃなかったけど、それでも……それでも僕にとっては一番の親友でした！あいつがいなかったら、きっと僕の人生はもっとつまらないものになっていたでしょう！やっかいなイワンをやっつけた時も、犬小屋を作った時も、いつも、いつも、あいつは僕の近くにくれてくれた……」身体と声の震えが、寒さを超えたところから湧き上がってくるのを、オロソ自身でさえも止めることができなかった。彫りの深い駅長のまなざしは微動だにせずにしつかりとオロソを捉えていた。

「きっと僕は、これからずっと、おそらく死ぬ間際まで、セパチカとの思い出を忘れないと思います。いえ、忘れてはいけません！ああ、僕は今になって後悔しています。これほどまでに思い出というものが焼き付いて離れないものだしたら、もっとたくさん思い出を作るべきだったし、思い出の一つ一つを慎重に、色濃く作っていくべきだった！僕は溺れ死んでもいいから、これにずっと浸っていたんです！ねえ、あなたにもわかるでしょう？あなたも昔は子供だったはずです！」オロソが気づかぬ間にも雪は降り積もり、夜闇は深く重くなっていった。やがて雪が全て溶けてしまいうのではないかとオロソが思うほどの間を開けて、やっと駅長はオロソに言葉を傾げた。

「君はたった今、一人の親友と別れた。それは君の言う通り、誰しもが経験することなのだよ。急ぐ必要もない、事務所に暖かいレモネードがあるんだ。それを飲みながら積もる話をしようじゃないか。今や私たちは友人なのだから……」駅長は手袋に覆われた大きな左手で優しくオロソの背を叩いた。オロソは嗚咽を続けながら、二人で階段を降りプラットフォームを去っていった。そして誰もいなくなったその空間では、汽笛の残響がようやく重さを持って降り積り、夜は一層嵩増^{かさま}していった。